

## 第1回講義 インTRODakション 「21世紀における健康管理を考える」

健康の価値は、失ってはじめて実感すると言われる。先進国では長寿社会を迎えているが、一生を健康で過ごすことは難しい。現代社会においては、生活習慣病、つまりは慢性疾患の占める割合が非常に高まっており、若い頃からの生活習慣が、長寿の恩恵を享受できるかどうか大きく影響する。医療は、誰もが平等に受けられる権利と日本では考えられてきたが、現在の医療体制の維持は、厳しい状況にある。健康格差がおこらないような社会を持続するためには、どのようにすればよいか考えていく必要がある。

**Key Words :** 健康、寿命、生命科学、生命倫理

若い頃には健康についてあまり考えないのが普通であるが、病気をすると健康であることの素晴らしさが、しみじみと感じられる。そして、日本において、人々が最も不安に思っていることは、実は「健康」に関連することであるといわれている。

健康は、世界保健機構(WHO)により 1946 年に定義されている(スライド 2)。健康とは、身体、精神的に病気にならないばかりでなく、社会との関わりを保てることとしている。さらに、スピリチュアル(毎日、生きがいを持って生きていけること、と私は捉えている)が大事であるとの議論もある。20 世紀に、先進国では、30 年寿命が延長した(3)。1963 年には、100 人余りであった 100 寿者(100 歳老人)も増加しており、2009 年には 4 万人を超えたと報告されている(4)。21 世紀の日本の医療の在り方を、「少子超高齢社会」であることを抜きにしては、考えられない(5)。

20 世紀の生命科学における、「感染症の診断と治療の進歩」「遺伝子の発見」は特筆に値する(6)。しかしながら、人類は、細菌やウイルス感染を克服できたわけではないし(大きな脅威に、現在なっている!)、遺伝子操作ができることは、医療の在り方を複雑なものにした。また、科学の進歩は、人々を必ずしも幸せにしているわけではない。例えば、「クローン人間」の可能性や、「老人が子供を産む」といった 50 年前は予想もしなかったことが現実におきているのは、科学知識が積み重なった結果だが、今まさにその時代に生きている私たちは、このような問題に対して、どうすればよいか答えを出す十分な知恵を持っているか疑問である。「知恵」は、「知識」と違って継承できない(7)。しかしながら、倫理的議論が必要な、医療に関連する様々な問題に私たちは直面しており、対処していかななくてはならない(8)。さらに、「医療資源の不足」や、医療格差として問題になっている「医療における不平等」をどうしていくかも、議論が必要である(9)。

このように考えてくると、「21 世紀の医療」はあまりにも複雑で、誰もが医療の恩恵を受けることを期待するのであれば、悲観的にならざるをえない。ただし、現代人の主要な健康問題は、望ましくない「習慣」による慢性疾患が原因となっているという事実がある(10)。「ヘルシーエイジング」の著者であるアンドルー・ワイル氏は、「高度医療の推進」を続けることによる医療の継続は不可能であるとし、徹底した予防医療の実践を提唱して

いる。喫煙を例にとれば、20 世紀前半には、健康に対して喫煙が、望ましいと考えられていた時期もあったようだが(11)、肺癌、心血管疾患の原因となることは、20 世紀の半ば過ぎには明白となった。にもかかわらず、日本で本格的に禁煙が問題されはじめたのは、ごく最近である。「予防の重要性」は理解できても実行が困難であるのは、人間の「不都合な遺伝子」によるのかもしれないが、遺伝子任せにしては、医療の問題は解決できないと考えられる。

ベストセラーである「世界がもし 100 人の村であったら」では、人々の幸せのためには、皆が予防を含む「基礎的な医療」を受けられることが、プライオリティーであると述べている(12)。病気を治すことにおいて、医療が果たす役割は限定的であることを再認識した上で(13)、より多くの人々が、寿命の延長を楽しむことができる(14)健康社会を築く必要がある。世界には基礎的な医療、教育を受けられないのみならず、飢えに苦しむ人々がいることも考えて行動できなくてはならない(15)。